

第31回真宗保育学会大会 発表要旨集

大会
テーマ

真宗保育の本質を考える

——響き合ういのち——

主催 真宗保育学会
会場校 武蔵野大学

第31回真宗保育学会大会 趣意書

響き合ういのち

子どもたちは、日常の生活の中で出会う様々な場面で、保護者や保育者、仲間の姿を手掛かりに、日々新しく出会う世界の扉を開き新しい経験をしながら、その中で世界への思いや姿勢を育んでいきます。人も、ものも、子どもが出会う出来事も、すべて子どもが育つ環境です。子どもが環境の中で主体的に活動し育つことの大切さは、現在の保育・幼児教育の中で特に強調されるところでもあります。いうなれば、保育者がどのようにものごとを捉え大事に考え、保育の環境を整えたり子どもたちを見守り語りかけたりしているか、そのすべてを空気のように感じ包まれ呼吸しながら、子どもたちは育っていきます。

この度の大会テーマを「響き合ういのち」とさせていただきました。子どもたちは、日々の生活の中で、自然や仲間と過ごし、共にいる楽しさ嬉しさと共に、思い通りにならないやるせなさや悲しみ等を伴う多くの体験をします。時には、自分の内なる思いと相手の思いとが、すれ違いぶつかり揺れ動いたり、触れ合い共鳴したりすることもあるでしょう。「いのち」の不思議や儂さへの感動や戸惑いを、仲間や保育者と分かち合うこともあるでしょう。このような日々の生活や保育の中で、子どもも大人も動植物も、すべて、限りのある、平等で、かけがえのない存在と尊ばれることを実感する体験は、みほとけの慈悲に包まれてともに響き合い育ち合う「いのち」について感じ考える機会ともなるでしょう。

乳幼児期の「いのち」を感じながら育ち合う経験が、これからの子どもたちの生き方、考え方、ものごとの捉え方、そして、社会や世界、地球そして宇宙への思いを形づくる根っことなります。だれもどのひとも分け隔てなく敬い大切にしようとする価値観は、SDGsやESD（持続可能な開発のための教育）といった世界の潮流、幼稚園教育要領等の3指針・要領の目指すところと共通するものでもあります。

子どもたちが「いのち」に触れる機会はおそらく日々の保育の中にあり、子どもたちにとって、共にいる保育者の姿が「いのち」についての思いや考えを深めるきっかけとなるのではないか。そのような保育を子どもたちが経験し育っていけるように、私たち保育者や保育者養成にかかわるものは何ができるのか。そのようなことを、本大会で真宗保育の歴史や保育実践を手掛かりに、考えあう機会となることを願っております。

基調講演やシンポジウム、研究発表にて、会員の皆様の日々の実践・研究の成果を披露いただき、もって真宗保育の本質を考える機会にできれば幸いです。

2024年7月

第31回真宗保育学会大会実行委員会

大会日程・参加ご案内

(1) 大会日程

1. 期 日 2024年11月29日(金)～11月30日(土)
2. 会 場 武蔵野大学 武蔵野キャンパス (東京都西東京市新町1-1-20)
理事会：6号館2階 第5会議室
公開保育：武蔵野大学附属幼稚園
開会式：雪頂講堂
基調講演：雪頂講堂
シンポジウム：雪頂講堂
研究発表：5号館グリーンホール CLS 1階
懇親会：5号館グリーンホール CLS 2階
閉会式：5号館グリーンホール CLS 1階
3. テーマ 「真宗保育の本質を考える―響き合ういのち―」
4. 大会プログラム

第1日目 11月29日(金)

◆ 附属幼稚園見学

- 9:30 附属幼稚園の見学希望の先生方 受付 (6号館 雪頂講堂)
10:00 附属幼稚園 見学 (～11:00)
11:00 理事会(理事のみ 6号館2階 第五会議室(1))
休憩 (6号館3階 6304教室を休憩室としてご利用いただけます)

◆ 大会 (第1日目)

- 12:00 受付 (6号館 雪頂講堂)
12:50 パイプオルガン演奏 伊藤 繁 先生
13:00 開会式
真宗宗歌
三帰依文
讃仏偈
挨拶
真宗保育学会理事長 若原 道昭
会場校 武蔵野大学教育学部幼児教育学科 学科長
講話 武蔵野大学 学長 西本 照真

- 14：00 基調講演 「響き合ういのち ～保育連盟75年、真宗保育の進む道～」
高輪 真澄 先生（保育連盟理事長・真宗保育学会副理事・光輪幼稚園園長）
- 15：00 シンポジウム 「響き合ういのち ～自然・子ども・保育～」
シンポジスト 景谷 裕香 先生（武蔵野大学附属幼稚園 主事）
渡邊 光一 先生（武蔵野大学附属有明こども園 園長）
松本 信吾 先生（岐阜聖徳学園大学教育学部 教授）
石上 和敬 先生（武蔵野大学 副学長・武蔵野大学附属幼稚園 園長）
司会 生井 亮司（武蔵野大学教育学部幼児教育学科 教授）
- 17：20 休憩
- 17：30 懇親会（5号館 CLS 2階）
- 19：00 散会

第2日目 11月30日（土）

◆ 大会（第2日目）

- 9：00 受付（5号館 CLS 1階）
- 9：15 大会実行委員会特別企画
「『如来』する仏教的インクルーシブ保育の理念—いのちの平等—」
渡邊 了生 先生（聖徳幼稚園理事長・園長、武蔵野大学教育学部非常勤講師）
- 10：00 自由研究発表
- 12：00 真宗保育学会総会
- 12：30 閉会式
恩徳讃（新譜）
三帰依文
重誓偈
挨拶
学会理事長 若原 道昭
- 13：00 閉会

(2) 参加者へのご案内

◆ 参加者受付

- ・受付は、1日目は6号館 雪頂講堂、2日目は5号館 CLS となります。ご来場いただきましたら、まず受付をお済ませください。
- ・附属幼稚園での公開保育（一日目午前）の受付も、6号館 雪頂講堂で行います。
- ・学内・園内にご滞在中は、受付でお渡しする名札を必ずご着用ください。

◆ 参加費について

- ・参加費は次の通りです。
 - ・会 員：4,000 円
 - ・非会員：5,000 円
 - ・学 生：無料
 - ・懇親会費（会員・非会員とも）：5,000 円
- ・事前のお振込のない方は、必要書類にご記入の上、受付で申し受けます。

◆ 要旨集について

- ・真宗保育学会ホームページで事前に公開するとともに、参加者に会場で配布します。
- ・それ以外にご希望の方は、実費で頒布いたします。

◆ 昼食に関するご案内

- ・1日目 11月29日（金）（6号館3階 6304教室を休憩室としてご利用いただけます）
6号館地下1階の学生食堂と、5号館隣の武蔵野カレッジショップ、7号館1階売店がございます。正門外にセブンイレブン（正門より徒歩3分）があります。
ご来場いただく前に、お弁当を三鷹駅構内外のお店で調達いただくことをお勧めいたします。
- ・2日目 11月30日（土）
学内施設は6号館地下1階の学生食堂のみ、となります。
正門外のセブンイレブン（正門より徒歩400m）または、三鷹駅構内外のお店をご利用ください。

◆ 懇親会について

- ・1日目、11月29日（金）17：30から、5号館 CLS 2階にて、懇親会を予定しております。ご参加は事前にお申込みいただいた方のみとなっております。

◆ 真宗保育学会総会

- ・2日目、11月30日（土）12：00から、5号館 CLS にて開催いたします。多くの皆様のご出席をお願いいたします。

(3) 自由研究発表（11月30日（土）について）

◆ 会場での資料配布について

- ・配布資料をご用意の場合は、発表当日に40部程度ご持参いただき、受付にお申し出ください。
発表前日の大会1日目に配布資料をお預かりすることも可能です。

◆ スクリーン投影用のデータについて

- ・会場には、WindowsPCとプロジェクター、スクリーン、レーザーポインターの用意があります。PowerPointをご利用いただけます。
- ・Macや特殊なソフト等が必要な場合は、PCの持ち込みをお願いいたします。
- ・スクリーン投影用のデータは、USBメモリでご持参ください。
9:00受付～9:10にて、試写をお願いいたします。

◆ 発表について

- ・発表時間は1人15分、質疑応答は5分です。
- ・発表時に必要なPCの操作は、発表者で行ってください。

◆ その他

- ・発表についてご不明の点やご要望がおありの場合は、事前に事務局までお問合せください。

■ 武蔵野大学・武蔵野キャンパス アクセス

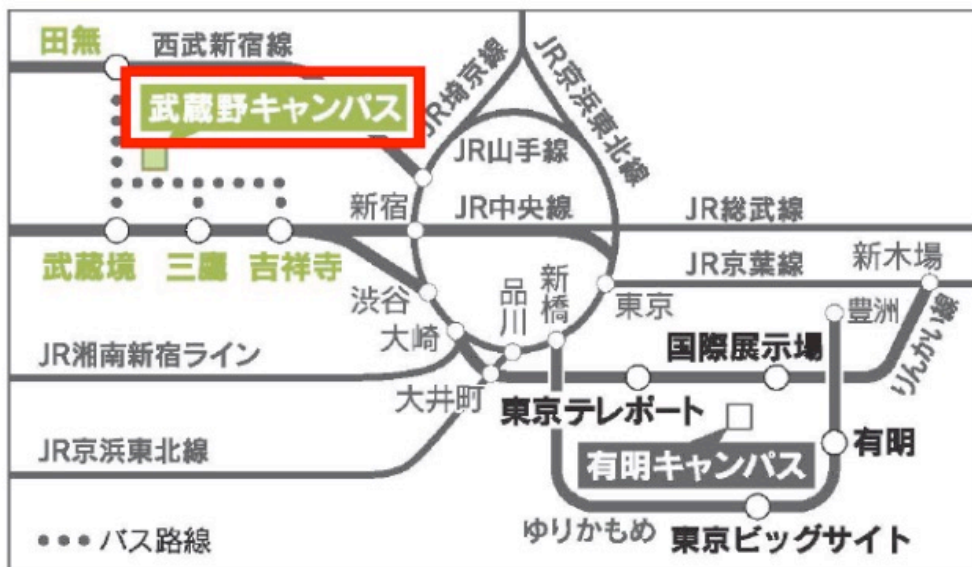
お車での来場はご遠慮ください。ご移動が困難な方は大会実行委員会にご相談ください。

路線	最寄り駅	最寄り駅から武蔵野キャンパスまでのアクセス
JR中央線	吉祥寺駅	北口1番乗場よりバス15分 「武蔵野大学」下車すぐ
	三鷹駅	北口3番乗場よりバス10分 「武蔵野大学」下車すぐ
	武蔵境駅	北口3番乗場よりバス7分 「武蔵野大学」下車すぐ
西武新宿線	田無駅	徒歩15分
		北口5番乗場よりバス5分 「至誠学舎東京前」下車 徒歩5分

武蔵野大学 武蔵野キャンパス案内図

◇会場は武蔵野キャンパスです。三鷹駅からバスでお越しいただくのが便利です

最寄り駅までのアクセス



最寄り駅からのアクセス

JR(中央線・有武線)・地下鉄東西線・京王井の頭線		
武蔵境駅 北口バス⑤ 三鷹駅行、武蔵野営業所行バス約7分 「武蔵野大学」下車	三鷹駅 北口バス④ 武蔵野大学行、武蔵境駅行、武蔵小金井駅行、ヴィーガーアン西東京行バス約10分「武蔵野大学」下車	吉祥寺駅 北口バス① 向台町5丁目、桜堤団地行バス約15分 「武蔵野大学」下車
西武新宿線		西武池袋線
田無駅 北口バス⑥ 武蔵境駅行バス約5分 「至誠学会東京前」下車、徒歩5分	ひばりヶ丘駅 南口バス① 武蔵境駅行バス約20分 「至誠学会東京前」下車、徒歩5分	

※上記のうち、直行バスも運行されている三鷹駅での下車が便利です。



〒202-8585 東京都西東京市新町1-1-20
TEL: 042-468-3111

武蔵野キャンパス構内図



※ご来場の際は、公共の交通機関でお越しください。

基調講演

響き合ういのち

— 保育連盟 75 年、真宗保育の進む道 —

講演者：高輪 真澄 先生（保育連盟理事長、真宗保育学会副理事長、光輪幼稚園園長）

講師プロフィール

1982年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科国史学専攻修了

慶應義塾高等学校非常勤講師（日本史）を経て、2006年4月より2023年3月まで、武蔵野大学教育学部幼児教育学科非常勤講師（仏教保育論 担当）。

現在、善永寺住職、学校法人善永学園光輪幼稚園理事長、園長。

浄土真宗本願寺派保育連盟理事長。真宗保育学会副理事長。

公益社団法人日本仏教保育協会副理事長。

講演要旨

1948（昭和23）年4月浄土真宗本願寺派の保育連盟の前身の「浄土真宗本願寺派保育事業協会」が発足しました。そして昨年が75年目に当たります。一昨年まで新型コロナウイルス感染症のため、種々の活動が制限され、やっと昨年それが終わり7月に本山で全国大会を開催することができました。しかしその時は75周年のことは少しも頭にありませんでした。私は秋になってそれに気がつき、では100周年に向けて連盟のデータを集め、歴史をまとめて見ようと思いました。

これまで保育連盟の歴史をまとめたものはなく、『保育資料500号記念誌』の巻末の「保育連盟の変遷」と題する年表があります。また関連資料として『仏教保育大学講座50年の歩み』の中に昭和32年からの第一回からの記録が残されていました。

そこで上記の史料を参考にしながら以下のことから調査を開始しました。

1. 連盟の役員名簿
2. 連盟の行った事業について 大会、研修会など
3. 加盟園数の推移
4. 作製した保育教材 保育資料 等
5. 真宗保育・まことの保育確立に向けた研究、試み
6. 連盟としてまとまることによって何ができたのか。 法人化 補助金など

調べてみてわかったことは、75年はとても長く、発足当時の資料はほとんど残されていなかったことでした。そこで周辺史料を探りながら、歴史を組み立ててみました。

(1) 発足当時の状況

太平洋戦争後、ベビーブームが起こり、各地で季節託児所や保育園。幼稚園がお寺で開設され始めた。そこで宗門として、この機会に宗教教育を受けたこどもたちに明日のお寺をそして日本をになってもらいたいと「一カ寺一保育園または幼稚園」というスローガンを掲げ一気に約1000園の加盟園となりました。

(2) 何をしようとしたのか

保育連盟が何をしようとしていたかは、毎年作られる年間計画書を見るとよくわかります。そこには大きく三つの事柄がありました。

① 真宗保育（まことの保育）の確立

当初は日本仏教保育協会の掲げる仏教保育をなぞりながら進められていきましたが、そこに真宗の独自性を加えた「真宗保育」に、そして「まことの保育」へと進められていきました。そして最新の保育理論や方法を取り入れていきました。

② 保育教材

真宗保育を行う上での独自の教材、資料の開発が各園から求められ、雑誌「保育資料」の創刊に至りました。また念珠や絵本に紙芝居など必要な教材を研究し弘めていきました。

③ 園の経営問題の解決

当初は行政からも多くの園の開設を求められてきましたが、その後幼稚園なら学校法人化、保育園なら社会福祉法人化が求められました。法人化して経営が苦しくなって廃園すると、残余財産はお寺には残りません。法人化を求める行政と、それを阻止しようとする園との間に入って、政治的請願なども行いました。

今回の基調講演では、現時点でわかってきた連盟の歴史を明らかにし、日々変化していく保育の現場、行政との関係、そしてまことの保育を考えながら、こどもに、保育者にそして保護者に、また地域の方々に「まことの保育」がどのように響きあい、心の安心をもたらしていったか。そしてこれから「まことの保育」を如何に響かせていくかを考えていきたいと思います。この調査研究には多くの方々に参加していただきました。特に本願寺保育連盟事務局のみなさん、龍谷大学短期大学部の中根真教授には感謝の意を表します。また醍醐定徹「蓮如上人の真宗保育（まことの保育）(2)」(『聖徳学園女子短期大学紀要』第25号、1995所収)も参考にいたしました。

保育連盟略年表

高輪真澄作成

1930	昭和 5	京都女子高等専門学校に本派本願寺保姆養成所を付設
1931	昭和 6	本願寺「仏教保育規定」を教示として発す
1944	昭和 19	本派本願寺保姆養成所を京都保姆養成所に改称
1948	昭和 23	蓮如上人 450 回遠忌を記念し、浄土真宗本願寺派保育事業協会設立 (法要中の 4/16) 保育事業協会は研究機関として「京都保育研究所」を設立 研究部は教材開発、舞踊研究講習会を開催。編集部は幼児を持つ母親のための新聞『母性タイムズ』を7月1日に創刊
1950	昭和 25	協会は『一寺院一保育園もしくは幼稚園』を目標として活動する 加盟園向けの「月刊保育タイムス」刊行 社会部は新設園へ仏旗一流、金百円を下付。百円は加盟料として『保育タイムス』を毎月贈呈
1952	昭和 27	明如上人 50 回忌法要記念保育事業大会開催 (4/12) 龍大図書館講堂にて
1953	昭和 28	機関誌『保育資料』を創刊
1954	昭和 29	「保育資料」に「保育カリキュラム試案」を発表
1957	昭和 32	真宗十派共催「仏教保育大学講座」開催
1958	昭和 33	4月16日「浄土真宗の生活信条」制定
1959	昭和 34	保育資料6月号「真宗の教えと保育」に「真宗保育」の言葉初出
1960	昭和 35	「真宗保育指導計画」発表 「浄土真宗の生活信条」に基づく4つの柱がうたわれる
1961	昭和 36	勝如上人「幼少年教化にたずさわる人々へ」消息発布
1963	昭和 38	『保育資料』に「まことの保育」という言葉初出。太田淳昭「創刊10周年」
1968	昭和 43	浄土真宗本願寺派保育事業協会を浄土真宗本願寺派「保育連盟」と改称
1970	昭和 45	『真宗保育者の願いと道一まことの保育』を連盟が出版 親鸞聖人誕生800年を記念してブロック別の「真宗(まことの)保育大学講座」が始まる
1978	昭和 53	「まことの保育指導計画案」を保育資料9月号別冊付録として刊行
1979	昭和 54	幼児教育振興共済金庫が発足
1980	昭和 55	9月、「保育資料」300号記念特集
1981	昭和 56	保育目標を改訂
1983	昭和 58	「幼児のおつとめ」を制定する 中堅・主任研修会を「まことの保育講座」と改名
1984	昭和 59	大谷範子お裏方、保育連盟総裁に就任。大谷嬉子前裏方は名誉総裁に
1985	昭和 60	第1回保育連盟欧州視察旅行 6/22-7/5
1987	昭和 62	第2回保育連盟欧州視察旅行 6/5-6/17
1989	平成元	『まことの保育体系』第1巻刊行、1年ごとに第2巻、第3巻を刊行
1990	平成 2	「まことの保育の理念」発表
1992	平成 4	「真宗保育学会」設立準備委員会が発足

1994	平成 6	学会設立に向け「真宗保育の研究会」第 1 回大会を保育連盟主催で開催
1997	平成 9	「真宗保育学会」設立大会開催
1998	平成 10	ハンドブック『ぼーしゃな』刊行
2000	平成 12	『保育資料』500号記念誌「保育資料 500号のあゆみ」発行
2001	平成 13	「まことの保育」に向けての実態調査アンケート実施
2003	平成 15	浄土真宗保育連盟ホームページ開設
2004	平成 16	『「まことの保育」に向けての実態調査アンケート報告書』発刊 『幼児のおつとめ』ビデオ制作
2007	平成 19	『仏教保育大学講座 50年の歩み』発刊
2012	平成 24	「組織教化部」所管から「社会部 宗教教育担当」に移行 「まことの保育課程」(試案) 教育原理委員会版発表 「全国園長研修大会」と「まことの保育セミナー」を合体し、「まことの保育全国セミナー」とし、以後毎年築地本願寺で開催
2014	平成 26	大谷流豆美お裏方、保育連盟総裁就任 『保育資料』を『保育資料 まことの保育』に改称(2014年5月号より) 『真宗の教えとまことの保育』刊行
2015	平成 27	第 30 回全国大会より会場が 6 ブロック持ち回りとなる
2016	平成 28	浄土真宗本願寺派保育連盟ホームページをリニューアル
2020	令和 2	新型コロナウイルスのパンデミックが起これ、2023年5月迄会議や研修会は中止やオンラインで進められる
2023	令和 5	5月、新型コロナウイルス感染症が 5 類に変更され、会議・研修会・大会が対面で実施される 7月親鸞聖人誕生 850年立教開宗 800年法要記念第 33 回全国保育大会を本山にて開催

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

シンポジウム

動植物とのかかわりの中で育つ豊かな心、 そしてつながっていくいのち

.....

武蔵野大学附属幼稚園 主事 景谷 裕香

話題提供要旨

武蔵野大学附属幼稚園は、武蔵野大学のキャンパス内にある、大変豊かな自然に囲まれた幼稚園です。この自然から季節の移ろいを感じ、四季折々の美しさを楽しみ、子どもたちは心豊かに育っています。また、この自然から多くの恩恵も受けています。

四季を通して野の花や木の実などを頂戴し、また様々な虫たちとの出会いもあります。野の花や虫、すべてに命があり、それを大事にしなければならないことを子どもたちと共に感じながら日々を過ごしています。

この環境での豊かな経験そして子どもが育っていく姿もありますが、本園が長きにわたり大事にし、取り組んできた動物、植物との関わりもあります。

まずは動物飼育。園では年少組はモルモット、年中組はウサギ、年長組はにわとりを飼育しています。子どもたちは動物をただただ可愛いと親しむだけでなく、毎日世話をしながらその動物を知り、命の温かさを感じ、そしてその命を愛おしく思う気持ちを知っていきます。また、動物たちの死による命の終わりも子どもたちは経験します。

そして、植物の栽培にて繋がる命も大事にしています。毎年学年で栽培するちゅーりっぷの球根やあさがおの種を、次の学年に引き継いでいます。また、園で栽培した野菜は、まずは栽培した学年で味わいますが、他の学年にもおすそ分けし、皆で美味しくいただいています。季節の実りを喜び、味わい、分かち合い、そしてその後も繋がっていく。さらに、それらを経験しながら、恵みに感謝していきます。

しかし、課題も多くあり、動物へ気持ちが向かない子がいたり、動物飼育での職員の負担だったり、子どもたちの栽培への気持ちの継続が難しく畑が荒れてしまったり。「繋がっていく命の大切さを子どもたちに知ってもらいたい」このねらいは揺るがずに、まずは余裕ある保育を目指し、課題に向き合わなくてはと思います。

このように、本園では動植物を通しての経験から、子どもたちが心豊かに育っていくこと、そして、これらの実践が、今そして今後の生きる力になるっていくことを願い、信じて継続していきたいと思っています。

動植物と子どものかかわりについて 保育の場面から

.....

武蔵野大学附属有明こども園 園長 渡邊 光一

話題提供要旨

本園は、りんかい線「国際展示場」駅より徒歩10分の所に位置し、園の周りに高層マンションが立ち並び、有明ガーデン、有明コロシアムなどもある。周辺には緑も多く街路樹やマンションの植え込み、芝などがある。園庭にもサルスベリ、ナンキンハゼ、クヌギ、コナラ、メタセコイヤなど数多くの木々が見られ自然に恵まれている。しかし本園の自然環境は直接関わり合える自然という意味では十分ではなく、園として自然に触れて感動する体験、自然と親しめる機会や保育者や友達とともに心が揺さぶられる機会を作る必要がある。

幼稚園教育要領、保育所保育指針はもとより幼保連携型こども園教育・保育要領では、自然との関わり、生命尊重の項目において、自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになるとある。

保育者自身が自然（動植物含め）と関わることの大切さを十分認識しつつ、幼児期の自然体験の重要性を理解し、自らすすんで自然と関わる感性や感覚を持つ必要があると強く感じる。経営方針の中で園児たちが自然に興味関心をもてるような環境を作ることを目標に掲げた。まず自ら動きエントランスに60cmの水槽を置き熱帯魚を飼った。園児たちは登園するとすぐに水槽に群がり、魚を観察している。魚が死んでしまったり弱っていたり、赤ちゃんが生まれたりするとすぐに報告に来てくれて日々変化を見逃さない。魚を見るのを楽しみに登園している子は水槽からなかなか動かない。また、門のところには多くのプランターを置き、様々な花を植えたり種をまいて花を育てたりした。プランターをしゃがみこんで様子を見ている子も多くいて、芽が出たことを話しに来てくれる。今までは気にかけていなかった身の回りに興味をもって関わっていく姿が見られる。保育者も自ら枝豆の種を植えて乳児たちと大切に育て、収穫を喜ぶなど自ら環境づくりに取り組む姿も少しずつみられるようになってきている。今までも園庭の畑では園児がキュウリ、ナス、ミニトマト、スナップエンドウを育て収穫し食べている。武蔵野大学と連携し畑体験もしている。それらの体験をしているときの子どもたちの瞳はキラキラ輝いており、興味関心でいっぱいである。日ごろの保育の中でまず保育者が環境というものに積極的に関わり創意工夫をし、子どもたちが自然に関わるきっかけをいかに作るかを常に考えていくことや、自然環境と関われるよう意図的・計画的にカリキュラムを再構築していくことが重要だと考えている。

いのちの響きが聞こえる保育

.....

岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授 松本 信吾

話題提供要旨

はじめに

日本の保育では、「自然」が大事にされており、要領、指針にも明記されている。とは言え、自然物が遊ぶための体のよい便利な遊具になるのであれば、それは他の遊具でもよいことになってしまう。では、保育の中で自然とかかわることの代替不可能な意味は何か。それは、自然の法則、いのちの法則に触れるという意味であると考え。その点を話題提供したい。

1. 自然の中に包まれることによるセンス・オブ・ワンダーの発動

面白さ、不思議さ、やってみたくて包まれる。大いなるものに抱かれる。

自然とアクチュアルに出会う身体を、子どもたちは備えている。

(子ども) いのちの音が響く身体⇔ (大人) 役に立つか立たないかで分別して見る頭

2. 遊び込むことによる「溶解体験」

・「遊び込む」ことで、世界に深く溶け込み、時間や空間を超えて世界と一体化する「溶解体験」が生まれる。(矢野智司)

⇒ 物や人との全面的なかかわりを取り戻す

⇒ 世界への根源的な信頼感や安心感を得る (大いなるものと響き合い、共にある)

3. 保育者にとっては「不等号の自覚」「私の自覚」

・大人は自然を分別で判断する。子どものアクチュアルな出会いを、狭く意味づけしようとすることで邪魔して潰す。

・子どもと出会うこと。子ども理解。たった一人の受け止める存在。

・常に「人間」>「自然」、「大人」>「子ども」として、コントロールしようとして生きている。いのちの響きを無視して生きている。

・子どもも自然も、私の思い通りにならないもの。自然の中での保育に、その気づきのチャンスがある。

・「常に自分の思い通りにしようとしている者よ」の呼び声がかすかに聞こえるチャンス。

4. いのちの響きが聞こえる身体を通した保育

- ・自分が「できる」と思っているうちは届かない。隙があるから伝わる、伝わっちゃう
(伊東亜紗)
- ・自然の中に身を置く。聴くのではなく手放す。“我”なるものの自覚。そこから聞こえてくる、届くものがある。自然の法則、いのちの法則から外れて生きる者よ。
- ・「私の中をいきているいのち」「自然の法則」の声を聴き、いのちが響き合っている人のそばに身を置き、その声を聴く。
- ・私たちは、皆、その“いのち”の法則の中にいる。

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

高楠順次郎の幼児教育

.....

武蔵野大学附属幼稚園園長・武蔵野大学 副学長 石上 和敬

講演要旨

本年、学校法人武蔵野大学は創立100周年を迎える。創立者の高楠順次郎は、日本のアカデミズムに近代仏教学の礎を築いた人物として知られ、文化勲章も受賞した国際的な仏教学者である。高楠はまた、仏典の決定版である大正新脩大蔵経の刊行を主導したり、武蔵野大学や中央学院大学はじめいくつかの教育機関の創設にもかかわるなど、その幅広い活躍は一学者の枠に収まりきるものではないが、そのなかで、高楠が1932年(昭和7年)に旧邸を開放して幼稚園を創設し、自ら園長をも務めたことは、これまであまり大きく注目されることはなかった。

そのような事情に鑑み、本発表では、高楠の創設したルンビニ幼稚園の概要やその教育方針等について当時の写真を交えながら紹介を試み、その理念が本日のテーマである「響き合ういのち」につながるものであるかを考えてみたい。ただ依拠する資料は限られており、高楠の「仏教と幼児教育」という短い論文や、ルンビニ幼稚園の園児募集のチラシ等になる。以下に、それらの資料から一部を紹介し、発表要旨に代えさせていただく。

高楠は、フレーベルの発案とされる Kindergarten というドイツ語がそのまま英語に取り入れられた事情にまずは興味を示しており、そして、その語に導かれる、「麗しい花園で花樹を栽培するよう」なイメージで、自然のなかで幼児をはぐくみ育てることに好感を持ったようである。また、高楠の教育理念は次のような文章にも表れているであろう。すなわち、「眞の幼児保育として、幼児の自然の生活を土台とし、幼児の心を以て心とし、童眞の地に住し、童蒙の手を把りて自由の天地に遊び」等々である。また、ルンビニ幼稚園のチラシにも次のようにある。「ルンビニ幼稚園は明るく清らかな幼児たちの楽園として生まれました」。

また、高楠は、幼稚園の創設にとどまらず、保母の養成、仏教保育の研究等をも重視し、それらを総合する「ルンビニ仏教学園」という構想をも懐いていたようである。また、幼児の母親への教育にも関心を持ち、マザースクールも開設している。

以上を高楠の幼児教育を考える話題提供の素材としてみたい。

MEMO

Dotted lines for writing.

大会特別企画

「如来」する仏教的インクルーシブ保育の理念

—いのちの平等—

聖徳幼稚園 理事長・園長 武蔵野大学教育学部 非常勤講師 渡邊 了生

講師プロフィール

1966年、京都生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程真宗学専攻 満期退学。

武蔵野大学・東京仏教学院 非常勤講師。元：龍谷大学・相愛大学・駒澤大学 非常勤講師。

〈専門分野〉：親鸞思想、中国浄土教思想。

〈幼稚園・寺院関係〉：聖徳幼稚園 理事長・園長。浄土真宗本願寺派東京教区 福源寺副住職。東京教区保育連盟理事。山梨県私学教育振興会幼稚園部会委員。

講演要旨

親鸞は、真実なる阿弥陀「如来・浄土」のはたらきを「光明」すなわち「智慧（さとりの）のかたち（言説・教え）」〈曇鸞：実相の智慧の相〉と明かす。従来の浄土教の伝統にいわれるビジュアル的に来世に実在すかのごとき「如来・浄土」表現を「方便化身土」と示し、真実なる如来・浄土である「真仏土（＝光明）」とを明確に分判する。

「真仮（真仏土と方便化身土）を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す。これによりて、いま真仏・真土を顕す。これすなはち真宗の正意なり。」

『教行信証』「真仏土巻」

そして親鸞は「真仏土巻」に、「真宗の正意」において真実なる阿弥陀「如来・浄土」とは「不可思議光如来・無量光明土」たる「真仏・真土」すなわち「光明」＝「智慧のかたち」であると明示する。その上で従来の浄土教に示される有的な「如来・浄土」表現を「方便化身土」と定め、これを「真仏土」を顕す為の「方便（権化方便）」として、あくまでもプロセス的手立ての内に、その表現形式の意味を限定的に認めていくこととなる。

ところで、今大会の「響き合ういのち」とのテーマを考えると、真宗保育において、その仏教的「いのち」の真意が明らかになるのは、「方便化身土」の仏への帰依ではなく、他ならぬ「真仏土」—真実なる如来・浄土—のはたらきである「光明」すなわち仏教にいう「智慧のかたち」—縁起・無常（さとりの）という道理—の説示への聞信・信順においてであろう。本願寺派の真宗保育である「まことの保育」では、その理念が〈親鸞聖人の生き方に学び、生かされている「いのち」に目覚め、ともに育ち合う〉とうたわれる。ここに示される、生かされている「いのち」こそが、縁起として「響き合ういのち」であり、ここに「ともに育ち合う」との「仏教的インクルーシブ保育

の理念—いのちの平等—」が了解されていくこととなる。

したがって、本願寺派にいう「浄土真宗の生活信条」を基本とする〈まことの保育「四つの目標」と「四つのおやくそく」〉に示す「①阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる＝わたくしたちはみほとけさまをおがみます」の「阿弥陀さま・みほとけさま」も、親鸞思想上においては、あくまでも「真仏土」＝「光明」といわれる仏教の「智慧のかたち」に耳を澄まし、礼拝・聞信していくこととなる。もちろん「まことの保育」の保育現場において、保育者と園児たちが共に「聞信という礼拝」を実践していくことは難中の難に他ならぬことは、現場に立つ私自身が身にしみて思うことでもある。同時に園児の宗教的情操教育としては「みほとけさまに手を合わす・おがむ」という実体験だけでも十分に意味のあることだとも承知している。園児たちが合掌し「ナモアマダブツ」と称える姿を見つめる度に「如来一如より来生」する仏縁の尊さを有り難く実感するのも事実である。ただ「キリスト教保育」の取り組みを見つめ学ばせて頂くとき、ゴッドへの礼拝と、阿弥陀如来へ手を合わせ礼拝することへの宗教的差異を、せめて保育者には深めてもらいたいと思うのは私だけであろうか？ だぶん、その差異の中に「④ なかよくする子どもを育てる・わたくしたちは みんななかよくいたします」とうたわれる仏教・真宗独自のインクルーシブ保育の理念—いのちの平等—の本質が顕わになると私は考える。

例えば『新キリスト教保育指針』（キリスト教保育連盟）においては「子ども一人ひとりが神によっていのちを与えられたものとして、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝をもって生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共に生きる社会と世界をつくる自律的な人間として育つために、保育者が、イエス・キリストとの交わりに支えられて共に行う意図的、継続的、反省的な働きである」と示される。キリスト教保育では、従事する保育者に対して「イエス・キリストを通して示される神の愛と恵み」が「ゴッドの啓示・言葉」として直感的にダイレクトに響いているように感じられる。その使命の中「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。(マタイ福音書)」との福音のもと「扉を叩くものは、すべてを引き入れる」との信念を受けキリスト教的「インクルーシブ保育」が自ずと実践されているように思われる。

さて、キリスト教保育においては「神によっていのちを与えられたもの」と語られるが、このようなキリスト教保育での「いのち」—いのちの尊厳—に対し、いま講題には「いのちの平等」との言葉を真宗・仏教独自の「インクルーシブ保育の理念」として付した。この「いのちの平等」とは小川一乗氏が教示される語である。小川氏は、これを創造主たる神への信仰を基本とするキリスト教にいう「いのちの尊厳」への対比として使われる。すなわち仏教の智慧（無常・縁起）に明かされる「縁起として共に生かされている〈いのち〉」を「いのちの平等」と呼ぶと共に、対する「いのちの尊厳」とは、尊厳がある「いのち」か否かへの峻別にもつながりかねない言葉となろうと指摘されている。

今回は、以上のことを念頭におきながら、まず親鸞のいう「真仏土」＝真実なる阿弥陀「如来・浄土」への理解を確かめ、私達へと「如来一如より来生」する「智慧のかたち」に礼拝する中、自ずとあらわとなろう「縁起として共に生かされている〈いのち〉」の教えを確認したい。そして、かかる「いのちの平等」の内実に「響き合ういのち」「ともに育ち合う」とうたわれる「仏教・真宗的インクルーシブ保育の理念」を見つめてみたい。

自由研究発表

子供の人権と性教育

—絵本を通して、こどもの性とプライベートゾーンの扱いについて考える—

ほうりんこころ幼稚園 武田 修子

研究発表要旨

こども基本法の施行を受けて、こどもの人権について様々な視点から考え直す機会が増えています。乳幼児期のこどもの性やこどもへの性教育も、日本の保育活動の中ではこれまでなかなか広まらなかった分野ですが、国際的には「包括的性教育」といって、性を「人権」という視点でとらえ、性の多様性やジェンダー平等を含めた広いテーマについて、幼いころから体系的に学ぶことが推奨されています。

わが園では、鍵のない男女混合のトイレに対して、ある女児が具体的な意見を述べてくれたことをきっかけに、園内のハード・ソフト両面からこどもの性について見直す取り組みや、こども同士、保育者同士の話し合いをすすめています。これまでは慣習的に、クラスが男女半数ずつだったり、男の子女の子の並ぶ列を分けたり、色で男女分けを行ったりといった、無意識的に性差を利用した管理方法や声掛けを行っているケースが多かったように思います。思い立ってすぐに変えられることもあれば、ハード面の整備に時間がかかるため、たとえば男女の制服が違うことや、男女が同じ教室内で着替えること、おむつ替えは男女混合で行わざるを得ないなど、変えなければならないと気が付いてはいるけれど今は難しい、ということもあります。

時代の流れの中で大きな枠組みをダイナミックに変化させることも必要ですが、保育現場においてまず大切なのは、こども一人ひとりの尊厳を尊び、その声に耳を傾けることではないか。そして、「あなたはどうしたい?」「あなたはどんな風に接してもらいたい?」と、こどもの思いを聞く風土を育むことが大切なのではないか。そう考え、わが園ではまずは保育者自身がこれまでの男女観、ジェンダー観を見つめなおし、少しずつ自分の意識やふるまいを変えていこうとしています。

性にまつわる保育者の取り組みの一つに、性教育の絵本の利用が挙げられます。わかりやすく性について学ぶだけでなく、保育者自身が、またこども自身が、性に対する意識を変容させ、男か女かという問題を超えて、一人ひとりに違ったニーズがあること、「このように接してもらいたい」「このように関わりたい」という願いがあることを知るのが目的です。

今回は

- ・『うみとりくのからだのはなし』(作・遠見才希子 絵・佐々木一澄) 5歳児向け
- ・『だいいだいい どーこだ?』(作・遠見才希子 絵・川原瑞丸) 3～4歳児向け

の2冊を選定しました。2冊とも、プライベートゾーンについての知識が得られるほか、人との距離の取り方や、ボディータッチの快不快、相手や性格やその日の気分によって、されたいことも刻々と変化することなど、性の問題にとどまらない、人と人との向き合い方、かかわり方を確認することができるような絵本です。読み手も聞き手も、構えることなく自然に学べるところが良いと考え、この2冊を使った読み聞かせに取り組むことにしました。

絵本には、産婦人科医である作者からのメッセージ、子どもたちにも「NO (いやだと言う)・GO (逃げる)・TELL (大人に伝える)」という選択肢があることが、わかりやすく提示されています。一人ひとりの尊厳を認められ、たいせつにされてほしい。いやだと言っても排除されない安心感の中で育ってほしいという願いが込められています。

絵本の読み聞かせの後、各クラスでサークルタイムを持ち、感じたことや思ったことを発表し合うことにしました。この2冊を使った読み聞かせを通して、子どもたちがどんなことを感じたか、また実際に読んでみて、保育者たち自身がどう感じたかについても、職員会議で話し合うことになりました。

子どもたちからは、「おもしろかった」「いやだって言おうと思った」「いやだって言ってもやめてくれん」といった声があがりました。触られるのがあまり好きではない登場人物に共感する声も聞かれました。「お母さんに触られるのは好きだけど、お父さんにはあまり触られたくない。(ごつごつしてるから・緊張するから・など)」という声や、「いつもぎゅっとしてもらいたい」という意見もありました。子ども同士が、みんなの感じ方はそれぞれで、同じではないと確認できたことはとても意義のあることだと感じました。だから、相手に配慮する必要があるのだし、自分の思いを大切にしてもらうためには「語る」というプロセスも必要なのです。

保育者からも、

- ・子どもにとって、いやだと言うことはそんなにハードルの高いことではないのだろうと思っていたが(「あれがいやだ」「これはいやだ」とよく言っているので)、意見を聞いてみると意外と適切な場面では「いやだ」と言えていないことが分かった。
- ・子どもが「いやだ」と言いやすい人間関係づくりや、環境づくりが大切だと感じた。
- ・お友だちの「いやだ」を聞いてあげようとする姿勢がみられるようになった。
- ・プライベートパーツは、教えていなくても意識している子どもが多いと感じた。言葉に出して確認し合うことで、保育者としても「プライベートパーツはなるべく隠してね」などと言いやすくなったと感じた。

等の意見が寄せられました。

男女の性差も、あるいは国籍や肌の色もそうですが、男の子だから、女の子だからと大きな枠組みの中に個人をあてはめてものごとを考えるのではなく、一人ひとりのニーズに耳を傾けていてねいに応えながらかわることが、子どもの人権を尊重する保育の基本姿勢なのだと痛感する毎日です。またこの姿勢は、一人ひとりをたいせつに、保育者自身の振る舞いや声かけを常に見直しながら、子どもとともに育ちあおうとする「まことの保育」の姿勢とまったく齟齬がないと感じています。絵本を通じて多様性を受け入れるやわらかい心を育てていきたいと思います。

動物飼育の現状と家庭や子どもにもたらすその効果とは (1)

—動物の生と死の受け止めを考える—

.....

武蔵野大学附属幼稚園 別府 涼子・望月 マキ

研究発表要旨

【実践研究の目的】 保育の中で、動物飼育を通して動物の世話をすること、動物の生と死に出会うことを子どもたちは経験する。動物と触れ合う中で見られる子どもの成長と、子どもたちがどのように動物の「いのち」を受け止めていくのかを考える。

【実践研究の方法】 令和6年度の4月～10月の年少組におけるモルモットの飼育の事例から、①動物と触れ合う中で見られる子どもの成長、②子どもたちが動物の「いのち」を受け止めていくプロセス、③家庭への影響について、事例検討を行う。事例検討に当たっては、令和6年度の4月～7月の保育記録、思い出し記録、園専属の獣医師による園児への講話内容記録及び園教職員への指導内容記録、および在園児保護者の連絡帳記述内容および著作物¹ (前田 2024) を資料とする。

【実践の概要と事例】

1. 本園での動物飼育の概要および現状

モルモットは、初めて世話する動物として扱いやすく、年少児にとっても興味や親しみを持ちやすい。年少組では、4クラスで2匹を各ケージに入れ、保育室廊下で飼っている。保育者からモルモットの好む草や世話の仕方等を教わりながら、飼育に挑戦していく。

2. 園での動物飼育の事例

(1) エピソード① 初めての園生活での動物と触れ合い (2024年4月)

入園当初の4月、初めての園生活で母親と離れる不安から毎日泣いて登園していた年少A児。モルモットがA児の差し出した草を食べたことをきっかけに泣き止み、保育室に入ることができた。その後、毎日1枚の小松菜を握りしめて登園し、モルモットに食べさせたら保育室に入るということを繰り返す。母親も、登園の励みになるようにと毎朝小松菜を持たせてくれる。A児の様子を心配していたが、餌をやると入室して遊びへと移るA児の様子を、降園時に保育者から聞くことで次第に安心した表情を見せるようになった。

いつも園生活で身近にモルモットがいて、自分の差し出した餌をモルモットが食べるというやりとりを通して、A児にはモルモットへの愛着が湧き、A児にとっての園生活における大事な存在になっていった様子がうかがわれた。

保育者は、A児の様子を保護者と共有しながら、家庭でもA児とモルモットの触れ合いができるようにと家庭での預かり飼育を勧めた。A児保護者も、A児の様子を見ながら、夏休みに家庭での預かり飼育を受け入れるようになった。

(2) エピソード② モルモットの死 (2024年4月)

4月18日。登園時に、子どもたちは、モルモットの一匹が空のケージの前に置かれた箱の中で動かなくなっていることを知った。ほとんどの年少児にとっては、初めての動物の死との出会いだった。年少各クラスでは、花を供え、保育者がモルモットの死について話をした。年少児は、触っても冷たく、動かない姿を見て「死」ということを感じ取る様子が見られた。通常はその日の

うちにお別れ会と埋葬をするが、今回は死因を調べるために解剖に出された。年長児は、年少時から関わったモルモットへの思い入れも強く、死の原因や犯人を突き止めようとする姿も見られた。空を見上げお参りする子どもやお供え物を自宅から持参する子どももいた。

保育者も、モルモットの死と、子どもたちの動揺する姿に心を痛み、どのように「死やいのち」を子どもたちに伝えるかを検討した。お別れ会の準備が整い、園の獣医師にも参加いただき、4月22日に園全体で、ホールの仏様の前でお別れ会を行った。獣医師からのお話の後、保育者は、子どもの思いに寄り添い、子どもたちがお別れ会までに感じてきた気持ちを代弁しながら獣医師に質問し、子どもたちから直接質問ができるようにした。獣医師からは「原因は、心臓の病気であり、悪いものを食べた訳ではない」という話があった。園児たちは、順にお参りをし、動かなくなった体に触れてお別れをした。年長児は、死因を理解することで「死」を受け止め、その後犯人捜しはぱたりとなくなり、話題にもしなくなった。その後、中庭廊下に貼りだしたモルモットの写真を見て、年少児は「死んじゃったね」と保育者に共感を求めたり、年中児も「好きだった草」の話をしたりしていた。

一方、モルモットが死んでしまった日と、お別れ会当日を欠席した年少B児は、空になったケージを見ては「どうして死んでしまったのか」「なんでいなくなってしまったのか」という疑問をしばらく持ち続けていた。保育者の話を聞き、B児なりに理解をした様子であった。その後、10月には「写真を見ていると寂しくなる」と、保育者に対して話す姿もあった。

モルモットの死に出会った保護者の中には、我が子の経験を法話としてお寺でお話された方や、我が子の様子から感じ取ったことを連絡帳で知らせてくれる方もいた。

【総括的考察】

1. モルモットの生と死の受け止め

年少児にとっては、モルモットは、自分が差し出す餌を食べてくれる存在として、保育者や仲間と共に、園生活での心のよりどころとなった。死んだ動物に触れお別れ会の過程を経て「死」とは「冷たく、動かなくなる」と「いのち」を理解し、保育者に確認を繰り返しながら思い返し、寂しさを感じる子どももいた。年中児も「好きな草」を思い浮かべるなど、死んだ後もつながりを感じている。年長児にとっては、年少時に世話をしたモルモットの突然の死に動揺が大きかった。お別れ会で専門家である獣医師の話から死因を理解すると共に、お参りを経て動揺が収まり、自分と動物の触れ合いを思い返し「いのち」を感じていたように思われる。

2. 動物の死を通して「いのち」を理解するプロセスへの保育者のかかわり

保育者自身も動物の死と子どもの動揺に戸惑う中、死の捉え方が年齢によって違うため、受け止め方や伝え方を変えていった。最後まで世話をすること、きちんとお別れすることを大事に子どもたちに伝えたく、お別れ会や埋葬を行っている。子どもたちがいのちの大切さを理解するうえで、日々の動物との関わりを通して愛着を持つことと、死を受け止めていく細やかなプロセスが大切であり、実体験が何より大切であると考えられる。

3. 動物飼育で生と死に出会うことについての保護者への影響

保護者は、動物との関わりで我が子の気持ちが安定することを感じ、自らも安心感を得られる。子どもの園生活での体験は、家庭でも生と死について話す機会や成長を感じ取る機会となり、保護者にも波及していると考えられる。

¹前田壽雄「いのちをみつめる心」編集工房ういす編『よろこび・167—お寺と家庭をつなぐ法話の便り』探究社 2024年7月

動物飼育の現状と家庭や子どもにもたらすその効果とは (2)

—現状を考える—

武蔵野大学附属幼稚園 望月 マキ・別府 涼子

研究発表要旨

【研究の目的】

本園は、学年ごとにモルモットやウサギ、ニワトリを飼育している。夏休みには、ふれあいボランティアを集い動物や園にいる生き物の世話をしている。また、ウサギ、モルモットを週末や長期休みに家庭で世話ができるように貸し出しを行っている。令和4年度はウサギの貸し出しが多かったが、令和5年度、令和6年度と減少している。令和4年度に貸し出し数が多かった理由、および動物の預かり飼育がもたらす園と家庭のつながりとその効果を検討するとともに、家庭での動物飼育の難しさや家庭が抱える現状と課題を検討する。

【研究の方法】

本園の令和4年度と6年度に年中園児の保護者へ実施したアンケート調査をもとに、家庭での預かり飼育の実際と効果および課題について、分析・考察する。令和4年度調査は、ウサギの預かり飼育を行った16家庭を対象にアンケートを行った。(回答数16家庭、回収率100%)。令和6年度は年中組86家庭を対象にアンケート実施する。

【家庭での預かり飼育のねらいと実施状況について】

園で飼育している動物(ウサギ、モルモット)を週末や長期休みに家庭で世話ができるように、希望家庭を対象に動物の貸し出し、家庭での預かり飼育を行っている。その目的は、親子で動物に対する愛着を持ち、動物が家庭でのコミュニケーションツールとなることや、親子で世話をを行う中で保護者が動物を大切に世話する姿を子どもに見せることによる教育的効果である。預かりの際には「お泊りセット」として、ケージ、給水ボトル、トイレ、エサ、掃除用具(掃除用ブラシ、雑巾、携帯ホウキ)、新聞紙、ウサギの図鑑、お世話の手引き、ブラシ、動物病院の連絡先を渡している。

令和4年度は、クラスだよりで預かり時の様子を紹介していた。それを読んだ保護者同士がウサギの世話の仕方や疑問点などを情報交換し、それが次への預かり飼育へとつながっていった。動物の受け渡し方法は、自宅が近い場合には台車、自家用車もしくは園バスでの受け渡しが可能だった。4月～7月にかけて希望者も多く、16家庭に貸し出しを行った。また、その夏の全国学校飼育動物研究大会では校種別で幼稚園の代表として実践発表をおこない、2学期の懇談会にてその内容を紹介した。動物と関わることで心の成長や重要性について伝える機会も意識して行い、2学期以降も貸し出し数は増えていった。

令和5年度は、4～7月で延べ6家庭(実数5家庭)による預かり飼育があった。前年度に預かり飼育をした経験から、進級しても引き続き、年中の時に学年で飼っていたウサギの貸し出しを希望する、同家庭で繰り返し預かる、期間を延長して預かる等の家庭もあった。受け渡し方法については、園児のアレルギーやバスの遅延に配慮し、園バスでの動物引き渡しができなくなるという変更があり、家庭にとっては幾分不便になった。

令和6年度は、園児が興味をもって動物を可愛がる様子や世話をする様子を伝え、預かり飼育の希望者を募るが、貸し出しに至った家庭は、4月～7月の期間にて1家庭にとどまっている。

【令和4年度及び令和6年度のアンケート調査結果】

(1) 家庭での飼育の実際（園児の様子、家族の様子、飼育に関する状況など）

子どもからの希望により預かり飼育を申し出、園バスにのせて動物を受け渡しする希望が多かった。家庭では、室温の調整が必要なため、エアコンのある部屋で世話をする。エサはいつでも食べられるよう、常にチモシーは入れておく。それ以外に食べられる野菜や草は、お泊りセットにある手引きを見ながら与えるようにする。ケージの掃除は毎日行い、いつも清潔にしておく。

(2) 家庭での預かり飼育をした園児の様子

園児とウサギのかかわりでは、ウサギが自宅にくること、ウサギを家族に紹介できることを喜ぶ。ウサギに話しかけ、家族のように接する姿が見られる。ウサギと1日中一緒にいられる、何度でも抱っこできることを喜ぶ。園ではウサギにあまり興味を示さなかった子どももエサをあげたり、撫でたりする。園児と家族とのかかわりでは、ウサギを家族に紹介できる喜びを感じる。家族に嬉しそうにウサギの世話の仕方を教える。

(3) 家庭での預かり飼育をした家族の様子

在園児だけではなく、卒園した兄弟が喜んで世話をする。保護者も、園のウサギを家庭で世話することで、ウサギをより身近に感じ、愛着心が芽生える。保護者がわが子の気持ちの変化を間近に感じる。家族で共通の話題が増える。

【考察】

(1) 家庭での預かり飼育の効果

① 園児にとっての効果

動物との関係では、園のウサギを家庭で世話することで、ウサギをより身近に感じ、愛着心が芽生える。園のウサギではあるが自分にとって大事なウサギという感覚をもつ。園で触れ合うより、より家族に近い感覚で接することができる。園では興味を示さなかった子ども数日一緒に過ごすことで、接し方がわかり、自分から触れられるようになる。また、自分が（園の一員として）預かったという誇り、使命感、自信を持つ。また、預かり飼育での経験が自信となり、その後、幼稚園でもウサギの世話を自主的に行うようになる。ウサギがいることで登園が楽しみになる。

家族との関係では、子どもから家族に動物の世話の仕方を教えるなど、子どもが家族にものごとを伝える役割を持ち、いつもの親子関係とは異なる相互関係が展開する。

② 家族にとっての効果

動物との関係では、園のウサギを家庭で世話することで、ウサギをより身近に感じ、愛着心が芽生える。子どもとの関係では、わが子の気持ちの変化を間近に感じるができる。また、家庭生活では、預かり飼育中、家族の会話が増えた。預かり飼育後もウサギのことを話題にしている。家庭でも動物を飼育しようと具体的に考え始めた。命を預かる責任感や緊張感もあり、命の大切さを家族で共有できた。

(2) 家庭での預かり飼育の課題

住宅の条件として動物が飼えない。すでにペットを飼っているため、ウサギと一緒に世話をすることが難しい。家族へのアレルギー症状が心配。動物の受け渡しが難しい。他。

これらの課題を踏まえ、今後の預かり飼育の広がりに向けての改善策として、ハードルが低くなるような工夫を検討し、提案していきたい。

藍の栽培活動を通した園児の「いのち」の経験について

—共に活動した学生の事後振り返りアンケートの自由記述に着目して—

武蔵野大学 教育学部 幼児教育学科

松田 こずえ 箕輪 潤子 生井 亮司 今福 理博

研究発表要旨

I. 研究の背景と目的

幼稚園教育要領や保育所保育指針の「ねらい及び内容」においては、自然や動植物に触れてその大きさ、美しさ、不思議さや生命の尊さに気付き、動植物に対する親しみや畏敬の念、生命を大切に作る気持ち、公共心、探求心などが養われることが求められている。これは、仏教におけるすべてのものに尊い「いのち」を見て、これを大切にする考え方に重なるものであり、真宗の教えにも「乳幼児期には、いのちそのものに触れ、いのちの不思議さや尊さ、みんな生きていることの素晴らしさを体感し、いのちを敬うところを育むことが大切」とであると謳われている（浄土真宗本願寺派保育連盟教育原理委員会 2014:2）。一方で、都市化やライフスタイルの変化、電子機器の普及と使用する子どもの低年齢化など、多くの理由により子どもたちが自然に触れる機会は減少の一途をたどっている。したがって幼稚園・保育所・認定こども園といった幼児教育施設において自然体験活動を保育に取り入れることの重要性はますます高まっていると考えられる。

本研究は、幼稚園の年長組の園児と、保育者を養成する学科の大学生とが、共に藍を苗から育て、収穫して藍染めをする一連の自然体験活動を通じて子どもが「いのち」について経験していること、およびその意味を明らかにすることを目的とした。

II. 研究の方法

本研究の対象は、M 幼稚園年長組園児（各年度約 80 名）と、東京都にある 4 年制大学の保育者養成系の学科「幼児教育プロジェクト」（2～4 年次選択科目）の履修者（各年度約 40 名）とで、藍の栽培を行った 2 年間のコラボレーション活動である。この科目は通年科目であり、園の年長組担任教諭と相談の上、園庭の一画に設けた畑で①春に土づくりと畝づくり、②苗植え、③初夏に水やりと草取り、④夏または秋に収穫した藍の葉を使用しての藍染め（ハンカチへのたたき染めと生葉染め）、⑤秋にタネ採りと草取りをして「畑じまい」、等の一連の作業を季節と藍の成長に合わせ、園児と学生が一緒に行ったことに特徴がある。学生 1 名と園児 2 名のグループになって子どもと会話しながら一緒に活動したため、学生は活動を通じて発せられた子どもの発言や、活動を通して経験している様子を具体的に知ることができた。活動後に学生は、Google フォームを利用したアンケートに自由記述で園児との活動を通した気づきを記入した（2023 年 5/9 月、2024 年 7/10 月の計 4 回）。

学生のアンケートにおける自由記述の回答はカテゴリー分析を行い、子どもが藍の栽培活動を通して、主に「いのち」について経験し学んでいると考えられることに着目して検討した。研究に関しては、筆者らが所属する大学の倫理審査委員会による承諾を得た。

Ⅲ. 研究結果

学生のアンケートの自由記述の分析から、子どもは藍を栽培する自然体験活動を通して、「いのち」を感じることにつながる、次の4点を経験していたことが示された。

1. 生命の成長と自然の不思議さ

学生の自由記述に「苗を植えるときに藍のあかちゃんだねといていた子どもたちが、夏休み明けには、大きく育った藍を見て『こんなに大きくなったんだ!』と驚いていました。」などがみられた。ここからは、子どもたちは、植物の成長や変化を観察することで、生命の神秘や自然の不思議さに気づき、自然のサイクルや成長のプロセスを通して、植物がもたらす多様な側面を感じていると考えられる。

2. 自然との触れ合いを通じた「いのち」のしくみへの興味

「子ども達は植物についての興味を持ち、ただ育つだけではなく誰かが水をあげて手をかけるからこそ『育つ』ということを知っていると考えた」等の記述からは、保育内容環境の内容に「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。」とあるように、園児は藍染の過程において藍という植物を変化させる行為を通して藍の成長にかかわる土、水、太陽という自然のしくみや恩恵を感じていたと考えられる。

3. 自然及び人とかかわる喜びや感謝の経験

「『畑じまい』の時、子どもたちがどの植物を引き抜けばよいか相談し合いながら、草に『ありがとう』と言いながら優しく抜いていた姿が印象的でした」などの記述からは、自然体験を通じて、子どもが自然に対する敬意を感じながら他者と協力することや、感謝することの大切さを感じる機会となっていたと考えられる。

4. 自然物を用いて表現することの喜び

「自分が選んだ葉っぱの形がハンカチに綺麗に模様として現れた時、子どもたちは目をキラキラさせて『すごい!』と感動していました」の記述からは、藍染めを行ったことで出てきた模様、自然の不思議さと自ら創り出したことの喜びを感じていたと考えられる。

Ⅳ. 結論

本研究からは、子どもが藍を栽培する活動を通して自然物と身近に触れ合いながら、他の子ども、学生、保育者と一緒に自然物の「いのち」の尊さを「ともに感じる」経験ができていたことが明らかとなった。また、本研究は保育を学ぶ学生のアンケートの自由記述を取り上げたものであり、学生や保育者が活動中の子どもをつぶやきや声、取り組みの様子に、目と心を開いて丁寧に耳を傾け、さらに活動後に振りかえり記録することによって、保育を通じた「いのち」の経験の理解に結びつけることができる可能性が示された。

謝辞：本研究は、武蔵野大学附属幼稚園の先生方、園児、学生のご協力により実施することができました。ここに御礼申し上げます。

【参考文献】 浄土真宗本願寺派保育連盟教育原理委員会 2014『真宗の教えとまことの保育』 浄土真宗本願寺派保育連盟

実践報告 千羽鶴プロジェクトについて

.....

武蔵野大学 教育学部 幼児教育学科 小川 房子

実践報告要旨

1. 活動の動機

2023年度の保育実践研究ゼミ4年生は、連日報道されるウクライナ侵攻の悲惨な状況に心を痛め、皆が幸せに生きる未来のために幼児期から世界の現状に目を向けることが必要と考えました。鶴プロジェクトと名付けられた千羽鶴を折る活動を通して、子どもたちと命の尊さを一緒に考えようと試みました。戦争のない日本で暮らす子どもたちに戦争や紛争地域の子どもたちの今を伝えることはとても難しく、学生と子どもたちが十分にテーマを共有することができず、活動の後半は、千羽鶴を完成させることに主眼が置かれたことが反省点でした。

(右頁は本学100周年記念事業での活動報告です。優秀団体賞を受賞しました。)

2. テーマの再検討・2024年度の活動内容

2024年度の保育実践研究ゼミ4年生は、先輩たちの反省を生かし、ともに生きる「いのち」に目を向ける活動にしたいと考え、動物への感謝や追悼の気持ちを込めて千羽鶴を作る取り組みとして鶴プロジェクトを引き継ぎました。11月の附属幼稚園での完成披露会・展示を経て、12月に上野動物園に奉納する予定です。また、動物をより身近に感じられるようにするため、図書室に「いのち・いきもの」をテーマとした絵本コーナー(別称:えほんのもり 計28冊)を設けて、千羽鶴を折る目的をより理解しやすいようにと改善しました。

ある活動日、学生が設置した絵本の中の1冊『かわいそうなぞう』(金の星社1970年)を図書室に戻しに来た女の子がいました。少し難しい内容だけに「ひとりで読んだの?」と聞いてみると、「先生が読んでくれた。かわいそうなお話だった。」と言って、像が死んでしまうページを開いて見せてくれました。後日、その女の子は、鶴を折り終え、「ありがとうしてきたよ」と声をかけてくれました。その子の追悼の気持ちと受け止めました。子どもたちは鶴を折りながら幼稚園の仲間であるモルモットやうさぎが死んでしまったことやクラスでお世話をしている鶏のこと、年中クラスにいるうさぎのことを学生に話してくれます。子どもたちが語る言葉を聴き、学生たちも鶴を折りながらさまざまな感情と出会っているようです。

3. 命のつながりについて

鶴プロジェクトと連動して展開する「いのち・いきもの」をテーマとした絵本を通して、命をいただいている現実も子どもたちに伝えたいと考えました。しかし、ネガティブなイメージにつながる可能性を考え、1学期はリストから除外しました。2学期はテーマを「食べる・生きる」として、『もうじきたべられるぼく』(中央公論新社2022年)を選びました。鶴を折るだけではなく、いのちのありがたさとも向き合える活動について報告したいと考えています。

2023年度活動報告：学校法人武蔵野大学 2023年度100周年記念アワード

千羽鶴をつくらう！

小川ゼミ4年（幼児教育学科）と武蔵野大学附属幼稚園年長組の子ども達

I 活動の概要

子ども達と今世界で起きている戦争や紛争について共有し、千羽鶴について伝える。その後、子ども達と世界に目を向けたコミュニケーションをとりながら、一緒に鶴を折る。週に2~3回、1回1時間を目安に園に赴き、千羽鶴の完成を目指す。完成した千羽鶴を活動の仲間を代表して大学生が広島市の平和記念公園に届け、附属幼稚園の子ども達とオンラインでつなぎ、その様子を伝える。

■活動の動機

世界では戦争、紛争が起きている、学校に通えない子ども達がいると、私たちが経験したことのない悲しみや苦しみを感じている子どもたちがいます。そこで私たちは、武蔵野大学の建学の精神である四弘誓願を基盤とし、世界のしあわせを考える活動をしたと思いました。幼児期から世界に目を向けることが世界のしあわせに繋がると考えた為、附属幼稚園年長児と共に、千羽鶴作成を通して世界のしあわせに関心を持つきっかけを作りたいと考えました。

■活動を通して大切にしたいこと

私たちは、来年の3月に武蔵野大学を卒業します。これまで、幼児教育学科で子どもの主体性を大切にしたい保育の重要性を学んできました。今回の活動においても、大学生主導ではなく子どもの主体性を引き出しながら「世界のお友達にみんなの気持ちを届けよう」を合言葉に、子ども達と一緒に活動します。

II 活動報告

小川ゼミ4年 千羽鶴作り

世界には 私たちが経験したことのない

悲しみや苦しみを 感じている子どもたちがいます。

きっかけは、来る日も来る日も 報道される、悲しい現実。「幸せとはかけ離れた状況」でした。

折れるかな... 自信はないけど やってみたい!!

活動の様子をご紹介します!

1学期は 友達と一緒に

2学期になると 1人で来てくれる子もいました!

沢山折っていくうちに

沢山折っていくうちに

だんだんと上手になってきて

だんだんと上手になってきて

だんだんと上手になってきて

「一人で折れるようになったよ!」

何も見ずに折れる子も増えました!

何も見ずに折れる子も増えました!

千羽到達報告会

千羽の鶴が登場した時には子ども達から歓声が上がりました。

「幼稚園は、ここ」「広島は、ここ」みんなで折った千羽鶴を広島に届けます!!

(アワード) 「がんばって!」「ありがとう」

千羽鶴の完成報告 「千羽鶴はね…」真剣な表情で聞いています。

千羽鶴って下から見たらどうなっているの?

【活動を通じて得たこと】
奉納された千羽鶴が、ただ燃やされてしまうのではなく、再生紙に生まれ変わっていることやその売上げが平和記念公園の維持のために寄付されていることを知った。子ども達への活動報告の場でSDGsについても、伝えることができた。

【活動を通じて学んだこと】
5歳児が鶴を折ることや、折ろうという気持ちづくりをすることは、私たちが想像していたよりも難しかった。やりたい気持ちと折れるのかという不安な気持ちの間で揺れ動き、葛藤があった子ども達であったが、視覚的にわかりやすいように折り方の★手順表を作成したり、一人一人のペースに合わせた関わりをしたりすることで、意欲的に取り組めるようになった。子どもたちの主体性を尊重することの難しさを改めて感じるとともに、物的環境、人的環境を整えることの大切さを学んだ。
★手順表の実物展示あり

■活動を終えて

稲垣 子どもたちにとって自分できた!と思える経験がやってみて!気持ちに変わり、その思いが一人から一人へと繋がっていきと感じました。
堀 “幸せへの願い”を「鶴」というカタチにして可視化できたことで、自分の思いを再確認できたり、子どもたちとの関係性が生まれたり、と良い経験でした。
阿形 世界のしあわせについて考えるきっかけをつくり、自分自身が考える時間となっただけでなく、保育者となる身として多くのことを学びました。
松島 はじめは一羽折るにも時間がかかり、千羽折れるのか心配していました。慣れていくたびに一日に折れる鶴が増え、子どもたちの成長を感じました。
酒井 折り方のわかりやすい伝え方やどうしたら来たいと思ってもらえるかを工夫し、関わり合いの中で子どもたちだけでなく私たちも成長できました。
坂元 子どもたちとの関係を築き上げながら世界のしあわせについて考えていくことができました。私たちの思いが世界に届いたらよいと思います。
岡 子どもたちは協力しながら一生懸命取り組んでくれていました。この活動が世界のしあわせに関心を持つきっかけになることを期待します。
高村 子どもたちと一緒に改めて平和について考えることができました。今回の活動が少しでも子どもたちの記憶に残った活動になればいいと思います。
樋口 活動の中で子どもたちが遠くにいる人たちのことや鶴について考える姿を見て、この活動をすることができてよかったと感じました。
榎下 千羽鶴を作ることは私にとっても子どもにとっても初めての経験でした。千羽並べた時の感動を子どもたちと共有できてよかったです。
齊藤 平和を言葉で伝えるのは難しいと思いましたが、千羽鶴を折ることを通して、子どもとともに私も平和を改めて考えるきっかけとなりました。

最後に...ともに活動してくれた武蔵野大学附属幼稚園の子ども達と活動を支えてくださった先生方に心から感謝いたします。

第31回真宗保育学会大会

発表要旨集

発行日 2024年11月16日

発行者 真宗保育学会第31回大会実行委員会

202-8585 東京都西東京市新町1-1-20

武蔵野大学 教育学部 幼児教育学科 真宗保育学会 第31回大会実行委員会
